

「青い空」を守る

沖国大へり墜落8年

沖国大に米軍ヘリが墜落した8年前と同じような青空が広がっていた。「私たちの世代が沖繩を守っていく」。13日、同大の学生たちは二度と事故を起こさせないと決意を新たにしていた。米軍普天間飛行場に、墜落事故が多発しているオスプレイの配備が予定されていることもあり、同大で開かれた「普天間基地から沖繩を考える集い」には、多くの学生や市民の姿があった。



「オスプレイは矛盾」

沖縄国際大学の書店に勤める喜友名充さん(42)は8年前、同大厚生会館でへり墜落の爆音を聞いた。「へりの音が聞こえるたびに、また落ちるんじゃないかと不安だ。オスプレイ配備には反対だ。普天間飛行場を返そうと言っているのに、基地を強化しようとしている。矛盾している」と厳しい表情を見せた。集いが開かれている最中も、普天間飛行場に向かうCH56へりの音がバラバラと上空に響いた。そのたびに、参加者は不満げな表情で音のする方を見上げた。強い日差しの中、意見発表をする学生を見詰めてい

た沖縄国際大2年の金城星海さん(19)は「亡くなった人がいなかったら、年々関心が薄れている気がする。他大学の学生なら、まづ落ちた日付は分からないだろう」と若い人の間で関心が薄れていることを指摘。「オスプレイが配備され、8年前のように落ちたら、一体誰が責任を取るのだろうか」と日米政府の配備を強行する姿勢に強い不信感を示した。

へり墜落時に焼け焦げたラッキの木をモニュメントに据えた沖縄国際大ホケットパークで集いを開く同大関係者(13日)

同2年の新里陸人さん(20)は事故当時、小学生で、父親と壁が焼け焦げた現場を訪れ、怖さを感じた。「へりが落ちた大学は(県内では)ここしかない」ので、米軍基地の危険性を発信していく役割がある」と話した。

した中学3年生の上江洲慶君(15)は「事故が実際に身近に起こったことを学ぼうと思って来た。オスプレイもあるのだから忘れないうちにしたい」と話した。

(2012年8月14日 31面)

☆8年前に起きた沖国大でのへり墜落事故について調べてみよう。

☆記憶を風化させないためにはどうすればいいか話し合ってみよう。